

特集 孤立化が進む社会と宗教のはたらき

座談会 地域ケアでつながるお寺と 「支縁」団体

吉水岳彦¹・山下眞実子²

大島泰江³・油井和徳⁴

司会：白波瀬達也⁵

2022年9月2日実施（於 光照院）

日雇い労働の街（寄せ場）として知られる東京・浅草山谷地域に位置する浄土宗光照院には、生活困窮者を支援する複数のNPO法人に関わりがあった人々のためのお墓が建てられている。

今回の座談会では、葬送・法要をはじめ「ひとさじの会」や「こども極楽堂」など様々な形で山谷での活動を行っている光照院住職の吉水岳彦氏、さらに光照院にお墓を建てた諸団体のうち、「訪問看護ステーションコスモス」の山下眞実子氏・大島泰江氏、「山友会」の油井和徳氏に、従来の貧困のみならず高齢化も進んできた地域で、宗教を介して人々の縁を新たにつないでいくあり方を語っていただいた。



¹ よしみずがくげん：浄土宗光照院住職、社会慈業委員会「ひとさじの会」事務局長

² やましたまみこ：NPO訪問看護ステーションコスモス理事長

³ おおしまやすえ：NPO訪問看護ステーションコスモス理事

⁴ ゆいかずのり：NPO山友会副代表、「山谷」地域ケア連携をすすめる会事務局

⁵ しらはせたつや：関西学院大学人間福祉学部教授

光照院・コスモス・山友会

白波瀬 今日の座談会は、地域社会における宗教者の働きや、お寺が持っているポテンシャルを読者の方々に理解していただく機会にしたいと思っています。特に、今回の座談会の舞台である山谷^{さんや}¹⁾を拠点に皆さんは色々活動されていますので、山谷に限らなくてもいいんですけど、山谷という地域で今どういう課題があるのか、そんななかで皆さんがどういう活動をしているのか、吉水さんや光照院さんとはどういう風に連携しているのか、そのあたりの話を聴いていきたいと思っています。まずは簡単に自己紹介も含めて、活動を始めた背景や、実際の様子などのご説明からスタートしていただいてもよろしいでしょうか。

吉水 光照院住職の吉水岳彦と言います。今日は光照院のことについても触れていただけるとのこと、まことにありがたく存じます。困窮や身寄りがないことでしんどい人たちに向き合う際に、宗教がどういう役割を持つのかについては、私も興味があります。皆さまから色々教えていただければ幸いです。

元々、光照院の先代も先々代も、子供たちの遊び相手をするのがお坊さんの仕事かと思うぐらいよく子供たちのために活動していた住職たちで、また困っている人やご家族の相談を聴いていました。お坊さんという生き方は、他の仕事と違って何かを作り出したり稼いだりしないので、極めて非生産的です。だからこそ、その時間を辛い人たちに捧げられる、誰か困っている人がいたら、その声を聴いていられる生き方でもあります。私はそこが良いと思って、お坊さんになりました。

2007年末、新宿を中心にホームレス支援などを行っている認定NPO法人「自立サポート生活センター・もやい」の代表(当時)だった稲葉剛さんから、身寄りがない人たちやホームレス状態の方々のためのお墓が欲しい、という相談を受けて、そのお墓作りから活動をスタートしました。もやいの他にも「新宿連絡会」「NPO新宿」など様々な団体の活動を見させていただきながら、路上に出ようが出まいが自分と同じ人間で

あって、最期を見送ることが、その人たちが残りの人生を一生懸命生きていくうえでとても大事だと教わりました。もっと多くのことを路上に暮らす方々から教えてもらいたいと思うようになり、活動に参加するようになりました。最初は新宿連絡会での夜回りを中心に、路上の夏祭りの供養を担当させてもらいました。あとはもやいに縁のある困窮者の葬送に関わりました。

やがて、自分の生まれ育った山谷で活動することも必要で大事なことだと思えるようになり、活動の軸足を自分のお寺のある山谷に戻して、2009年に知り合いのお坊さんたちと「ひとさじの会」²⁾という活動を始めました。路上生活者への夜回りや声かけを中心にしています。池袋の「TENOHASHI」など、他の困窮者支援団体の活動ともつながっていき、その追悼や夏祭りの法要に出たり、山谷の夏祭りで供養を任せていただけるようになっていきました。

ひとさじの会は一人の人を最期まで看ることができないという意味では非常に不完全な団体です。それでも活動が続けられているのは、山谷という地域に医療や福祉、生活相談、その他居場所の支援などをする色々な団体が近くにあったからです。私たちが生活相談のことで困っているときには山友会さんたちに頼らせてもらったり、困窮者の方々の医療のことでわからないことがあると今日お越しのコスモスの山下さんに相談をさせていただき、何とか今まで過ごしてきました。困っている方を支援する場におつなぎする役割はさせていただけるのではないかと



吉水岳彦（よしみず・がくげん）

大正大学浄土学にて僧侶資格を取得。同大学院にて中国浄土教や仏教社会福祉を学ぶ一方、電話相談トレーニング等を受ける。2009年、生活困窮者等の“葬送支縁”や“おむすび支縁”を行う「ひとさじの会」を設立。

思っ、今も、声かけを中心に活動しています。

最近では、お寺の裏に「こども極楽堂」を作って運営しています。路上に暮らす人々への炊き出しや夜回りをするを、よく「絆創膏を貼るような活動だね」と言われることがあり、対症療法ではない予防的な活動も考えるようになりました。加えて、路上の方々からは、子供時代の不遇や苦しい思いの後、どこも行く場所がなかった、つながる場所がなかったという話を聞かせてもらっていて、大人の貧困や困窮に対する子供時代の困窮の影響が大きいことを知りました。それで子供たちの居場所としてこども極楽堂を作って、「NPO台東区の子育てを支えるネットワーク」による無償学習支援やフードパントリー（食糧支援）を運営してもらうようになりました。さらに極楽堂の2階に、兄弟を亡くしたり親を亡くした子供たちがしんどいときに来られる場所として「グリーンフケアライブラリー『ひこぼえ』』というのものも、「下町グリーンサポート響和国」によって作られました。幼少期のグリーンケアもまた、その後のアイデンティティの形成に影響する重要なことだと思っています。

もう一つ新しくスタートしたのが、看護や介護をしている方々のしんどさを聴くような場で、「あむりた」という団体によって極楽堂に開かれるようになりました。元々はひとさじの会のボランティアで路上の方々のためにマフラーを編みながら色々な話をしたり聴いたりして下さっていたあむりた（編む利他）は、緩やかにお茶を飲みながら色々な人のしんどさを聴こうと活動の形を変化させていきました。

あと、このお寺の活動の特色の一つとして、在日ベトナム人との協働が挙げられます。在日ベトナム人の皆さんはホームレス状態の方々の支援活動にたくさん参加して下さったり、困窮するご家庭の子供たちのために野菜や果物を送って下さったりもしています。一方で私たちも、日本で困って辛い思いをしている在日ベトナム人たちや外国籍の方々への食糧支援のお手伝いをさせていただいています。そうしたことが縁となり、心の置きどころというんでしょうかね、遠く離れた故郷で親が亡くなったり、兄弟や親族が亡くなったときに、このお寺で一緒に手を合わせてもらうことも増えてきています。

白波瀬 ありがとうございます。たくさんの活動があつてすごいですね。一通りお話をうかがってからまた質問させてください。では、山下さんお願いいたします。

山下 訪問看護ステーションコスモスの山下と申します。よろしくお願ひします。

コスモスは1999年の秋頃から色々準備しはじめて2000年の4月からスタートし、もう22年になります。法人格としてはNPO法人を取りました。訪問看護ステーションコスモスという名前なので訪問看護が中心なんですけれども、最初の立ち上げのきっかけとしては山谷で路上生活の方とお話ししたいとか健康相談したいという想いがありつつ、でも訪問看護として成り立たないとそういう色々な支援活動もできないということでお出しました。

私はここを立ち上げる前は准看護学校の教諭をしていたんですが、例えばお辞儀は何度でなくちゃいけないとか、前髪は全部ピンで留めなさいとか、すごく一つの枠に入れるような教育方針の学校だったんですね。そういう形から入るようなあり方は違うんじゃないか、と思いつつも現場で実現できるわけではなくて、個人的に消耗していました。その准看護学校の前はベトナムの難民の人のお世話をしていたということもあって、おぼろげながらすごく興味があった山谷に来て、最初は山友会さんを訪ねたり、「ふるさとの会」さんのボランティアに参加しました。そこから訪問看護ステーションでもやろうかなと知り合いの看護師に声をかけ、当初は看護師3名と事務職員1名の4名でスタートしたんです。

その後、志のある大島さんとか、新宿連絡会や「シェア=国際保健協力市民の会」からも、この地域だからこそやりたいという多くの看護師の方に来ていただきまして、いま山谷と横浜の寿町に持っているステーションを入れると看護師は30名くらいになりました。現在は東京都からの委託事業となって、山谷地域にある旅館の健康相談や、路上の方たちが毎日相談に来てくださるような健康相談を月曜から金曜まで開いています。また、委託事業ではなく自分たちで独自にやる活動として

は、月に2回、デイサービス用のお風呂を活かして路上の人たちに入らせていただいたり、健康相談したりという「いこいの間」の活動もしています。

白波瀬 デイサービス制度を利用してお風呂を使う方はいますけど、その制度外でも広く活用しているということでしょうか。

山下 制度外ですね。路上の、制度に乗っかれない人が来てそこでお風呂に入らせていただいたり散髪もするという。

活動としてはやはり、最期まで看取りたいという思いが強いです。最初の頃は、旅館に訪問へ行っても最期はその方がどこに行ったかわからない、みたいなことが多かったんですけども、2002年に「きぼうのいえ」さんという最期まで看る集合住宅ができて、それだったら私たちもきぼうのいえさんみたいな施設を持てばいいということで、最初にコスモスハウス「おはな」という宿泊施設を持ち、さらに支援付アパートもやらせていただきました。普通のアパートだと大家さんが「もうそれは困りますよ」と言うんですけども、自分たちのアパートだったら最期まで看取ることができるのではないか、といった形で。

白波瀬 実際に訪問看護をやりながら住まいの経営をされるということは非常に珍しいケースかなと思うんですけど、1つだけではなくていくつか持ってらっしゃるんですね。

山下 13室のコスモスハウス「おはな」が1つと、アパートは「そら」「ゆい」「こかげ」がありましたが、マンションが建つというので前の事務所とアパートから追い出されてしましまして、今は新しい事務所1階がデイサービス、2階が訪問看護の事務所、3階にアパート「にじ」を開いています。「ゆい」と併せてアパートが2つ、利用者は合計25人です。

白波瀬 他の地域も当然訪問看護はあるんですけど、この地域ならではの訪問看護の特徴やご苦労も色々あるのかなと思っています。

次に大島さん、いかがでしょうか。

大島 大島です。訪問看護ステーションコスモスで訪問看護師として働いて21年になります。私はこちらに来る前には一般のご家庭に伺うような訪問看護ステーションに5年ぐらいおりまして、そこがちょっと傾いたときに、知り合いの山下さんに誘われて山谷に参りました。全然私は山谷を知らなかったので、東京にこういうところがあるんだ、という感じで、見学してちょっと衝撃を受けました。男性・単身者・貧困の方が多いというのは大きな特徴だと思います。

この地域で訪問看護をするにあたって、まず、開設当初はよく「お前何しに来た」「金儲けだろ」と言われるので、訪問看護を受け入れていただくことがすごく大変です。それと、相手の方に本当に生きる意欲がないと、いくら看護の技術があってもそれは無効になってしまうんだなというのを、山谷ではすごく感じます。喪失を多く抱えてらっしゃる方が多くなってことでしょうかね。

最近では看取りまでその方の居場所を本当に作っていくこと、単に看護というだけではなくてその人の人生も丸ごと抱えていくような感じになっていくところがコスモスの特色かなと思っています。看護技術を提供するというだけでなく、人間学というか色々な発見があって、もうズブズブと入り込んでいってしまったような感じで20年が過ぎております。特に時代のなかで、在宅で看取るという形へ国としても方向転換がなされてきていて、しかし実はなかなか進んでいないんですね。けれども、そんななかでも山谷の地域はいま政府が謳っている「地域包括ケアシステム」を先取りしているような地域でしたので、やっついて毎日が楽しくて、楽しいという言い方はおかしいけれど、色々なことを自分たちでチャレンジして作っていく毎日で、どんな方と今度出会えるんだろうかというのがすごく励みになって今日に至っております。

白波瀬 ありがとうございます。また、その話もじっくり聴かせてください。

最後に油井さん、お願いいたします。

油井 NPO法人「山友会」副代表の油井と言います。代表のルボ・ジャンさんはカナダ人のカトリック宣教師ですが、布教活動をするよりも山谷の「おじさん」たちとともに生きていくことを自らの人生としている人です。

山友会はホームレスの方や生活困窮状態にある方の支援を行う団体で、1984年頃に無料診療所の活動を始めたのをきっかけに団体が設立されています。今は無料診療所の運営をはじめ、生活相談、地域のドヤやアパートで暮らされている方の見守り、炊き出し、路上生活をなさっている方に対してのアウトリーチ、一人暮らしが難しくなった方のための居住支援施設「山友荘」の運営もしています。後は「居場所・生きがいづくり」の取り組みやアート・プロジェクトをやったり、我々と関わりがあった方のためのお墓、共同墓地を光照院さんで運営したりと、さまざまな活動を行っています。

路上生活というのは住まいや収入・仕事がないということも大きな問題ではあると思うんですけど、その背景にある、社会的に孤立をしているということや、生活困窮に至る過程のなかで深い孤独感を感じてしまっているということがより大きな問題かなと思っています。なので、路上生活をなさっている方たちの様々なニーズに応えるような取り組みを通して、つながりとコミュニティーを作るということをやっているという感じですね。

僕は大学で社会福祉の学科に在籍していて、3年のときに所属したゼミで色々なNPOを知るなかで山友会に出会いました。それまではなかなかホームレスの人と関わる機会がなかったので、高度経済成長期に日雇い労働で生活をしてきた人たちがいたということも知らなかったし、山谷にはドヤに住む人やホームレスの人が多いというのは何となくわかっていたいながらも、彼らが生きてきた時代背景や、たとえば戦災孤児で

物心ついたときから親の顔を知らないというような、さまざまな人生があることを想像することすらできていなかったのに、自分の浅はかさに気づかされたとともに、単純におじさんたち一人一人の人生をもっと知りたいという気持ちを感じるようになりました。そして、4年生になったときに、たまたま山友会の生活相談員の非常勤スタッフに欠員が出たことで、「働いてみないか？」と誘われたのに応じて、そのまま居ついて今に至ります。活動をとおして出会ってきた方と関わりつづけるうちに、血はつながっていないけれども自分にとって家族のような存在になってきて、今日はどうしているんだろうといつのまにか自然に気にかけている感じなので、ホームレス問題や貧困問題という社会問題を解決しようとか、ホームレスの人を救いたいというような使命感で続けている感覚ではないです。山谷の人たちに育ててもらったというような感覚があるので、その恩返しという気持ちもあると思います。山谷に来て15年ぐらいになるんですけど、山下さんや大島さんには当初から色々教えていただいています。

お墓と仏壇を通じてつながる

白波瀬 ありがとうございます。山友会の方でお墓を作ろうというプロジェクトが動いて、光照院に設けられたということだと思いますけど、そのあたりの経緯を訊いてもいいですか。

油井 関わりがあった方が亡くなった後にご火葬されて、そのご遺骨がいわゆる無縁仏、身寄りのない方のご遺骨を納める共同墓地に合葬されてしまうと、どこに行ったかわからなくなってしまいうんですよね。だから「お彼岸とかお盆に手を合わせに行くようなこともできないし、ちょっと寂しいよね」という話がずっとありました。また、代表であるジャンさんには「おじさんたちと一緒に生きているんだ、死んでも一緒にいたいんだ」という信念があった。そういういきさつがあるなかで、我々が吉水さんと深く知り合うようになってから話が本格的になったと

思います。

吉水 実は面白いもので、今はもやいのスタッフになっている元朝日新聞記者の磯村健太郎さんが、自分が取材した先の人同士を結びつけるんですよ。磯村さんのおかげで知り合ったフードバンクのはいじまかずまさ配島一匡さんと山谷で何か緩やかなつながりを持つとうというような話があったなかで、山友会の皆さんとも知り合ったのです。

あのお墓のことにに関して私がよく覚えているのは、ジャンさんが弟のようにすごく可愛がっていたAさんのことですね。山谷で亡くなって、遺骨をご実家のお墓に入れてもらえるということで、直接お骨をお連れしたんです。ところが、家の恥さらしで身内として認めないというようなニュアンスのかなり厳しいことを言われて……。ジャンさんは、彼が一生懸命生きてきたにもかかわらず、何でこんな扱いを受けなくてはいけないだととても悲しまれました。こんなことだったら自分が直接ご供養すればよかった、とずっと語っていました。

油井 それは大きかったでしょうね、彼のなかでね。

吉水 直接的には、Aさんのことがあった後に、高齢のBさんが亡くなって、お骨の行き場がなかったことが山友会さんとお墓を作るきっかけになりました。

山下 山友会さんのちょうど隣に、コスモスのお墓も建てさせていただきました。

以前は、山梨のお寺さんで遺骨を預かっていただいていたんです。その住職さんが、樹海で亡くなった身元のわからない方を吊っていて、路上の方たちも同じような思いをしてるのではないかと、といった形でもやいを通じて私たちにご紹介いただいて、10年ぐらい遺骨を納めていました。ただ、その住職さんがお亡くなりになって息子さんの時代になったら、ちょっと持って帰ってほしいということで、そのときお

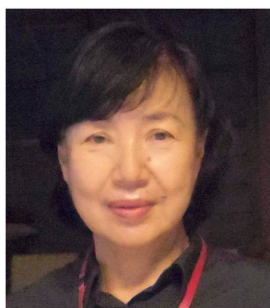
納めしていた40数体の行き場がなくなっていました。ちょうどその頃、山友会さんたちがクラウドファンディングでお墓を作ったということがあって、それだったら私たちもそれにあやかってお墓をこちらに、と言ったら、吉水さんの方で本当に心温かく迎えてくれたという感じでした。それでそのとき、持ってきたご遺骨をこちらの光照院さんに入れていただきました。ありがとうございました。

吉水 本当に不思議なことに、ちょうど山友会さんのお墓の隣が空いたんでしたね。

山下 隣が空いて、大島さんと一緒に山梨から移してね。

白波瀬 ここにコスモスのお墓があるのは存じていたのですが、そういう行き場がなくなったものだという経緯は知りませんでした。

山下 それで、訪問看護といった仕事柄、癌のターミナルの方などの最期を看取ることが多いので、山友会さんもそうだと思うんですけども結構多くの方を看取りさせていただいて、さらに自分たちのアパートだけではなくて地域の方でもお墓に入りたいという方がいらっしゃって、そういう方も一緒に入っていたいたり。



山下眞実子（やました・まみこ）

三井記念病院で看護の基礎を学び、総合病院で臨床経験を重ね、ベトナム救援センター、看護教員を経て、2000年特定非営利活動法人訪問看護ステーションコスモスを立ち上げる。



山友会とコスモスのお墓

白波瀬 年によって違うと思いますけど、年間何人ぐらいの方をお看取りするのでしょうか。

山下 そうですね、前はかなり看取ってたんですけども、今は山谷の方だけじゃなくてご家庭がある方をお看取りすることも多いので、年間光照院さんに入れさせていただいているのは5~6体ですね。

吉水 はい。春か秋のお彼岸にお納骨していますね。

山下 いま分骨してお墓に入れていただいている数は50人は超えていると思います。

吉水 山友会さんとコスモスさんのほかに、きぼうのいえさんのお墓と「結の墓」もあります。結の墓にはNPO新宿、新宿連絡会、もやい、つ

くろい東京ファンドという4つの団体の人が入っていて、毎年一緒に供養を行っています。あと、近々、新しくビッグイシューさんのお墓を建立する計画があります。これはまだコロナの対応でみんな忙しくてなかなか進んでいません。

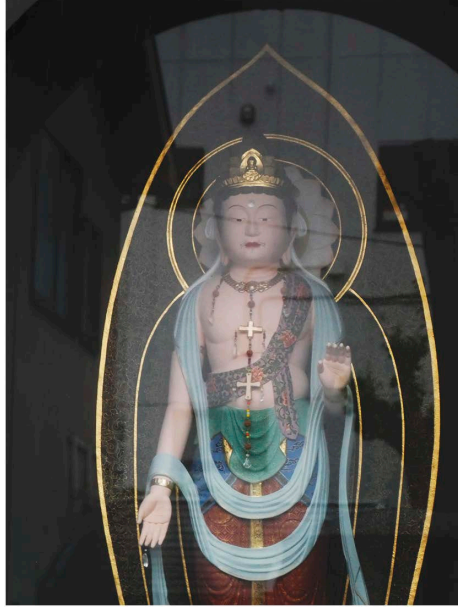
白波瀬 ありがとうございます。あと、お墓に関して光照院さんがすごく工夫されているのは、浄土宗のお寺だけれども、浄土宗の信仰を持っている方だけではなくて、色々な信仰を持っている方々を受け止めるような工夫をされてきたと聞いていて、この点も地域連携していくうえで大事なのかなと思います。

吉水 それこそ、山友会さんのお墓プロジェクトが始まったとき、一番最初は仏壇からだったと思うんですね。

油井 ああ、うちのですか。

吉水 ええ。Bさんが亡くなったときに、山友会さんの新館に、まず手を合わせる場所をつくるために小さい仏壇をお寺から持っていきました。あわせて、仏像も持っていきました。ただ、ジャンさんはカトリックの宣教師さんで、シスターも働いています。また、利用者さんには仏教徒もいるので、これは仏教とキリスト教の両方のシンボルが必要なのではないかと思ったわけです。それで、当時勤めていらしたシスターに、仏壇を持ってきて仏様も一緒にお連れしたんだけど、神様かマリア様もここにお招きいただけないでしょうか、と相談したら、「任せて！」とマリア様を連れていらっしゃり、仏壇のなかに阿弥陀様とマリア様が同居することになったのです。そして、お互いの信仰をお互いに大事にしよう、ということでシスターたちとも話をし、一緒にお参りをするようになりました。

お墓を建てるためのクラウドファンディングをやったときには仏壇の写真を公開したり、特典として、障害者施設にて散華^{さんか}という仏教の儀式



納骨堂の「あさくさ山谷光潤観音像」

で使う蓮華型の紙を製作してもらい、そこに阿弥陀様とマリア様が手をつないでいる絵や可愛いお墓の絵を印刷してもらいました。

山友会さんとコスモスさんのお墓を作ったときには、そこに全部のお骨は入りきらないので一部を分骨して元々お寺にあった納骨堂にも合葬したんですけれど、最終的に納骨堂でみんなが合流するならば、やはり宗派や宗教に関係なくみんなで手を合わせられるようにしたいなと思いました。それで、どの仏教宗派の人も拝みやすい観音様を選び、なおかつ十字架があればキリスト教の人も一緒に手を合わせやすいでしょうし、マリア様とイメージを重ねてくださると思って、観音様の胸には十字架を入れてもらうことにしたんですね。仏師さんは東北の震災で知り合った方で、問答しながら作っていただきました。仏師さんとのあいだで、単純に十字架だけつけていると観音様がキリスト教に改宗したみたいになってしまうという話になって、結局、お釈迦様の悟りの象徴であ

る菩提樹とイエス様の愛を想起させる十字架を交互に配するデザインで、両者の調和した形を考えていただきました。

白波瀬 お寺がその地域と手を結び、地域の中で重要な社会資源になっていくときに、宗派や宗教に関係なくつながりを作っていくために色々工夫する余地があるという、座談会記事を読まれる方にもヒントになるお話です。これだけが正解だとは思いませんし、宗教の別はすごく大事な側面だと批判なされる宗教者の方もいらっしゃるかもしれませんが、僕みたいに特定の宗教に強くコミットしていない人間からすれば、間口が広く包容力のある場所だな、と思いますね。

吉水 そのように思っただけならば光栄です。ちなみにこの観音様に一番よくお参りしているのは、山谷で活動するシスターかもしれません。「ほしのいえ」の中村訓子^{のりこ}シスターは、本当によくお参りにきています。このように異なる信仰の者が同じ人のことを想って一緒にお参りできるという経験からは多くのことを教わりました。本当にしんどい思いをして最期を迎えた方を見送る際、その死を悼む多くの人が所属に関係なく集えることは大切なことだと思います。宗教が人と人とのつながりを阻害するのではなく、もっとよりよくつながっていくためにお互いの信仰を尊重できるような関係になることが大事だと、山谷の諸団体、それこそ山友会さん、きぼうのいえさん、コスモスさん、また山谷に暮らす身よりのないおじさんたちとのつながりから教わったように思います。

高齢化・震災とコロナ禍での変化

白波瀬 お話を聴いていると、光照院は古くからこの地域で活動するお寺ではあるけれども、必ずしも山谷の色々な支援団体さんとの付き合いがずっと深くあったわけでもない、というところは意外でおもしろいですよね。

大事な前提として、山谷は元々日雇い労働者の街で、単身の男性が多

く暮らしており、もちろん貧困の問題も抱えていたところから、おそらく1990年代の後半～2000年代ぐらいからだんだん高齢化が進んできて、高齢の問題、失業の問題、生活保護を受けていらっしゃる方が多くなってきて福祉的な課題が前面に出てくる。そういう状況のなかで、「住まいはどうしていくの」とか、「最期どうやって迎えるの」とか、「医療面も含めて在宅での生活をどういう風に支えていくの」、そんな動きが出てきてコスモスのような団体が新しく立ち上がったたり、光照院が動き出してひとさじの会をやりはじめたりとか色々な活動をここで展開していくなかで、元朝日新聞の磯村さんも介しつつ、もっと前から長く活動してきた山友会も含めてゆるやかに繋がっていく、という感じなんですかね。

油井 あの頃から急にという感じですよ。

吉水 色々行き来する機会が増えていったんですよ。

昭和20年代から50年代ぐらいまで、先々代住職の時代の光照院は、山谷のドヤ主さんたちと関係を持って活動していました。その住職が、山谷での青少年の育成、すなわち、労働者と子供双方の生活をどのように守るか、という問題意識から区議会議員になりました。そのため、先代住職である私の父が活動を代わりにやることになります。山友会さんができた1984年(昭和59年)頃からは、「ふるさとの会」(1990年活動開始)など色々な活動団体が現れました。ですので、昭和60年代には光照院が山谷で積極的に活動する必然性がなくなっていったんだと思います。昔の僧侶たちは「陰徳」と言って、やったことを誰にも言わないし書き残すこともあまりしません。だから私も大人になってから自分のお寺が山谷で活動していたことを知ったくらいです。

2015年にお墓を作っているの、今のようなつながりができたのは東日本大震災前後ですね。

油井 そのころには付き合いが深くなって、ひとさじの会さんからクリ

ニックの患者さんや相談者の方を紹介して下さったりという行き来、連携は生まれていました。

吉水 私たちが路上のおじさんたちにアウトリーチしながら、山友会さんのところで無料の医療が受けられるということを伝えて、医療がきっかけで路上を脱出していく人たちも多くなりました。活動での連携の開始は、2011年ぐらいですね。

油井 お墓の話もすぐに吉水さんに相談しようという話になり、ほかの選択肢は思い浮かばなかった記憶があります。

大島 2011年というと東日本大震災で、それで私たちが気仙沼とかに行っただけですけど、やはりお互いに明日の命がどうなるかわからないと感じたり、おじさんたちの将来だけではなく、これから自分たちがどうなっていくんだろうということを私たちも考えさせられたし、私もグリーンケアのことに興味を持ったのはちょうどその頃からでした。

白波瀬 人をどう吊うかとかどう看取るかとかという問題がすごくクローズアップされてきたタイミングだったのかもしれないですね。もちろん以前から単身者が多い地域なので、単身でどうやって最期を迎えるかとかどういう風に看取るのかというのは、たぶん課題としてはあったと思うけれども、それがますます顕在化していく時期だったのかなと思います。背景的には単身者で家族との縁が薄い、経済的には貧しい、というものが以前から共通するなかで、何か違う部分がありますか。病気の重たさですか。

山下 訪問看護をやって20年以上になるんですけども、最初の頃の利用者さんと今の利用者さんとはやはり違いますね。圧倒的にみんな体を悪くしててそういう意味では重症度も違うし、大島さんが言ったように「その後をどういう風に考えているのかな」という形で、私たちと

話すような機会が多くなりましたね。

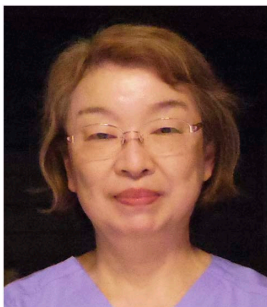
大島 私たち看護師は病院から来ると、病気を治すとか予防するとかといった視点があるんですけど、地域に入ると、その人がどういう風に安らかに人生を全うしていくかというように、看護の視点も変わってきたのかもしれない。

山下 変わってきましたね。

大島 やっぱり横にお墓を持っていると、「どこ入る？」みたいな話も自然にできるようになったので。(一同笑)

山谷の方がふるさとを失くすということは帰る場所もなくなってしまうということだから、それに対して新たに「山谷にちゃんと俺たちのお墓がある」と思うことは大事で、私も最近看取った方に、「この地域の人がみんな入ってるなら、光照院さんに入れてくれ」と言われました。「ここで生きてきたし」みたいな。

山下 いわゆる在宅での看取りができるようになったというのが大きな違いかな。昔は在宅で看取れないので、皆さん病院に行って最期お亡くなりになり、知らないうちに終わってしまう感じだったのに対し、今はどこも宿泊所を持っていて、きぼうのいえさんが一番多く看取っている



大島泰江 (おおしま・やすえ)

三井記念病院で看護の基礎を学び、1997年より訪問看護ステーションに勤務、2002年から訪問看護ステーションコスモスに在籍。グリーンケアに関心あり、スピリチュアルケア学会スピリチュアルケア師を取得。

んですけれども、同じように山友会さんも私たちコスモスも宿泊所を持っているので、そこで亡くなる。そうやって最期まで住む場所があるということは、やはりその人にとってはすごい大事なことだし、「最期、ここで逝っていいのよ」といった形で話せるようになった。

白波瀬 本当に死ぬ間際になったときに「これからどう逝きたい」とか「亡くなった後こうしてほしい」ということも語られやすくなり、そのニーズを引き受ける機会が増えてきたんですね。なるほどです。

吉水 あと、今年すごく驚いたのが、コロナ禍になって3年目を迎えた今年、一斉に路上生活者支援団体から追悼供養の依頼がきたことでしたね。新宿の追悼供養は10年ぐらいやっていなかったんですけど、いきなり夏祭りをやるのではなくてまずは追悼したい、ということで今年再開したんですね。これは本当にびっくりしたことです。みんな仲間たちが亡くなっていて、この何年かコロナで会っていないあいだに亡くなった人たちのことをお互いがよくわかっていなかったりもしました。新たに亡くなった仲間の写真を増やし、みんなで手を合わせる機会を設けたのでした。

同時に山谷でも、山谷労働者福祉会館から「夏祭りは感染者が3万人を超えていて開催できないんだけど、追悼だけはやろうと思う」と連絡があって、城北労働福祉センターの前で追悼供養を行いました。当初の予定では30人ぐらいと思っていたところ、当事者の方々が100名以上お越しになりました。過去に山谷で活動して亡くなっていった人たちの思い出を一生懸命語ってくれる人もいて、とても良い供養の時間だったと思います。

それと、ふるさとの会さんからも追悼供養の依頼がありました。コロナで病院に送り出したら遺骨で帰ってくるということが続き、心がついていかず辛かったといいます。利用者さんとスタッフが一緒になっての合同供養が求められました。

今までつながっていた方が亡くなって、その方のことをゆっくりに思

い返していくなかで、追悼供養は自分の生きている意味や、何のためにここにいるのかということ省みる時間にもなっているのでしょうか。すでにそういう場を作ってきた山友会さん、コスモスさんとはまた別で、こういう形で今年から供養を頼まれることが続いたことには、私も驚いています。

支援する側とされる側が近い場所

白波瀬 山友会さんも色んなおじさんとの関わりがあって、ここまで話に出てきたAさんとかBさんというのは、かなり山友会のなかでは目立つ存在というか、付き合いが深いというか、みんなよく知っている感じだったのでしょいか。

油井 そうですね。Bさんはコスモスさんにもお世話になって。

山下 山友会さんから「この人をお願いします」みたいな形でうちのアパートに入る人もいるし、それから訪問看護させていただく人もいるんですけど、「亡くなる時はどっちのお墓に入りますか」と訊くと、みんな山友会さんのほうに。(一同笑)せめてお花はこっちが出そうということ。

白波瀬 そういう意味では山友会さんとコスモスさんというのはお仕事のかなかでつながったり、連携したりすることもよくあるんですね。

山下 よくありますね。利用者さんだけではなくて職員でも、掃除の方がいないと「誰かいない?」と言って、よく働く人を山友会さんからご紹介いただいたりとか。山友会さんは、山谷の色々な団体のなかでもみんなに分け隔てなく接しているという形で慕われているんですよ。

私たちがたまたま医療系というので、コスモスの宿泊所には今、昔の山谷で中心的な労働活動家だった方々が3人入ってるんです。昔はすご

く活動をしていて、でもやはりだんだん年を重ねると自分も病気になるわけですよね。そういう活動していた人をお世話できるというのはすごく嬉しいし、宿泊所を持っていたからこそかなと思いますね。

大島 山谷って、ケアや支援をする側とされる側が近いというか、両方の立場になりうる、自分も年老いて亡くなる時が来る、ということを知りながら暗黙のうちにも反省させられる場所という感じがしますよね。

油井 そうですよね。境目がない。

白波瀬 今回の話は山谷が舞台ですが、もう少し普遍性のある話にもなるかなと思っていて、以前であれば家族がいることが前提の社会で、家族や最期亡くなったときに看取りする人がいないとか残った遺骨の行き場がないというのは例外的な問題だったのに対し、今ではもうそれは例外的なことではなくて、かなり一般的な広がりを持つようになってきています。

そのときに地域のなかでこういう看護を担う方々であるとか、あるいは居住支援をするような方々とか、お寺とか、そういったところがつながっていくことの重要性があり、つながりを持っているか持っていないかで地域の暮らしの質が大きく変わってくるのかなと思うんですけど、僕がずっと研究している釜ヶ崎の場合、地域が問題視されたり割とネガティブに見られることが多いんですよね。でも今みたいな話を聴いていると、安心して単心者として生きていける場所で、孤立しているけど孤立していないというか、そういう良さもこの地域にはあるように思います。支援者同士の安心感もあると思うし、あと利用者さんがどういうふうに感じていらっしゃるのかとか、そのあたりについてはいかがでしょうか。

山下 単身の人が山友荘やコスモスの宿泊施設で最期を看取られるということは、その人にとってとても安心だし、必ず誰かの目があるという

ことと、「最期まで寄り添うよ」ということをお互い確認しあっている面があるので、うちのスタッフでも大島さんでもそうなんですけれども、知り合いも上に入れられないかな、とか思うわけです。(笑) 上というのは、20名以上の看護師がいる2階の上の3階が支援付きアパートになっているので、もう絶対的に安心できていいですよ。(一同笑)

吉水 私も何かあったらもうコスモスさんにお世話になります。(一同笑) 山谷地域に住んでいる檀信徒がコスモスさんにお世話になって、つながりが重なることはお互いにとって安心する材料が増えていくことにもなりますよね。

あとはお墓ができたことで、山友会さんに関わりのある方々が本当によくお墓参りにお越しになります。コロナ前までは、お彼岸になるとゾロゾロとみんな来て、先遣隊がお墓を磨いたり、戻ってジャンさんを迎えに行くチームがあったり、他にもゆっくり歩いてくるわけです。こんなにみんながお墓参りを楽しみにしているのかと驚くぐらい一生懸命磨いて、よく手を合わせて帰られるのを見ていて、皆さんが持っている心象風景、過去の大事な記憶とつながっていらっしゃるご様子は、見ている私も嬉しいものです。

お参りのときに「あいつが見てたら何て言うかな」といった話をおじさんたちがしているのを見ると、皆さんは单身独居なんですけれども、つながりがなくなっているわけではなくて、亡き人も生きている人たち



油井和徳 (ゆい・かすのり)

認定NPO法人 山友会 副代表。平成19年に東洋大学社会学部社会福祉学科を卒業後、同会に勤務。山谷地域の医療機関、介護事業所、居住支援や生活支援を行うNPOなどで構成される「山谷」地域ケア連携をすすめる会の事務局のほか、NPO法人えん(精神障害者支援)理事、更生保護法人同歩会理事、ダイバーシティサッカー協会監事などを務める。

ともつながるための一つの大事な場が、お墓になっていると感じます。最近きぼうのいえのお墓ができて、きぼうのいえの利用者さんたちも、介護の方が一緒に付き添って本当によくお参りに来られるんですね。昨日も来ていました。別に血族でも何でもないわけですけど、いつか自分が行くところで、一緒にここで暮らした仲間がもうすでに入っているところです。そこを皆さんが大事にしてよくお参りに来るのは、安心感が出てくる場所だからだと思っています。

大島 山友会からお墓参りに一緒に歩いてくるときに、「俺は入れてもらえるかな」とか「ジャンさんから許可が出るかな」とか言ってますよ。私もご一緒したことがあるんですけども、ああ、こういう会話になるのか、みたいな。(一同笑)

白波瀬 コスモスさんの方でもお墓を持ってらっしゃいますが、コスモスさんの利用者同士のつながりというのはあるんですか？

山下 山友会さんみたいなサロンのようなものがあまりないので、代わりになるのがデイサービスですけど、やはり制度枠のデイサービスと、山友会さんみたいに好きな者同士で外で集まっているのとはちょっと違うので、つながりがあるようだけれどもちょっと薄いですね。

大島 コロナの前は桜を観に行ったり、色々やっていたんですけど。

白波瀬 お墓参りするときに、じゃあコスモスの利用者さんで行きましようか、というのは。

山下 来られる人はいたよね。

大島 あるいは、亡くなって納骨する方にたまたまご縁があった、生前に仲良くされていたという方がいるとお連れしていますね。

白波瀬 スタッフさんなんかもお参りに行かれたり、亡くなっていく方をずっと見ていらっしゃるときに、お墓があって、いつもではないけれども定期的に、お彼岸とか色んなタイミングでお参りに行くということが、亡くなられた方を振り返ったり思い出したりというよい機会、活動を支えるものになっているのでしょうか。

山下 納骨するときにはうちのスタッフがみんな来ます。最期まで看取ってお墓に入れていただけるというのは、看ていた者のグリーフケアにもなって、そこまでやりきったなという思いがあるんじゃないですかね。

白波瀬 単に利用者さんの行き場があるだけではなくて、ケアに携わられる方々にとっての意味もきっとあるんだろうと思います。

今日は墓の話が結構出てきましたけども、世の中の的には「墓なんていらんよ」と、あるいは墓は面倒な存在と思ったり墓じまいがどんどん進んできたりという、そういう時代状況のなかで、でもここでは新しく墓づくりが結構進んでいるというのはとても逆説的で面白いです。家族の形が変わっていて、古くからの親族関係みたいなものは希薄になっているかもしれないけれども、血縁ではないつながりみたいなものを象徴するような場所自体は、必ずしも廃れているわけではなくて、むしろそういうものが求められている側面もあるのかなと思います。血縁を問いなおしたり、あるいは新しい地縁の形がどういうものなのかを考え



司会・白波瀬達也(しらはせ・たつや)

2022年より関西学院大学人間福祉学部教授。関連する業績として『宗教の社会貢献を問い直す——ホームレス支援の現場から』(ナカニシヤ出版、2015年)、『現代日本の宗教と多文化共生——移民と地域社会の関係性を探る』(共編著、明石書店、2018年)など。

る、よい機会になったと思います。

できることに限りがあるなかで

白波瀬 話が戻ってしまうかもしれませんが、途中で大島さんがすごく重要なこととして、「生きる意欲がないと看護しても看護にならない」と言っていたことについても考えていました。孤立して先の見通しが立たなくなったときに、「もうわしなんかどうなってもええんや」というような、ある種、生きることへの欲求みたいなものがなかなか生まれにくい状況のなかで、でも看護という形で関わっていくじゃないですか。利用者さんが残された命をよく生ききるうえで、看護はどんな関わりをしているのでしょうか。その過程で変わっていかれる方もいると思うんですよね。

あと、最初に吉水さんが言っていたのは、お寺でも看護でも自分のできることというのは実は限りがあって、色んな連携のなかで何とかなっている部分もあるということですがけれども、孤立しがちな人たちが地域のなかで何とか生きていき、自分の生というのを肯定しながら安心して亡くなられていくうえで、勘所になるような支援ってというのは何なんだろうか、ということも伺いたいです。

大島 生きる意欲、そうですね。例えば糖尿病の人であつたりしたら、私たちはお薬の管理やインスリンを打つというように看護師だからこそできるミッションがあつたりするんだけど、そうではなくて、大事な的那个人が「今日一日生きていこう、この薬を飲んだり、その治療を受けて自分がよりよく生きよう」と思うことです。それなしにいくら薬や注射の話をしていてもダメで、結局は、吉水さんも皆さんもされていると思うんですけど、ご本人が大事にしていることやご本人が悲しかったこととか、そういう話をお聴かせいただくことが必要で、さらに、そこに「わかったよ」とは言えないんですよ。やはりそれはすごく個別な、特別な体験なので。でもそこに一緒に佇むことで、「自分に味方してくれ

る人なんだな」「この人を信用してもいいんだな」と思われないと次にいかないので、そこを大事にしているのかなと思います。そういうなかで「故郷をなくして帰るところがないんだよ」という話が出たりしたときに、「最期まで一緒にいるよ」と言うとともに、「故郷に帰れなくても故郷があるよ」とお墓のことなどをお話すると、すごく喜んで安心してくださって「一緒にやっついこうか」という話になり、療養生活が少しずつ成り立っていくというようなことがありますね。

そのときには本当に看護師だけじゃダメで、それこそ山友会さんを頼って見守りしてもらったり、あのおじさんたちだったらこういうアプローチがいいんじゃないかというような色々な知恵を借りたり、あるいは「お寺で少し話を聴いてあげてくれる？」みたいなことを吉水さんをお願いしたりして、看護師だけではなくてみんなでマンパワーを出していくみたいな感じですかね。

白波瀬 「『山谷』地域ケア連携をすすめる会」のようなケアワーカー同士のつながりもあると聞いていますし、実際に伴走型支援をやっていくうえでも一人だけで支援していくのはすごく大変なだけけれども、利用者さんにとっても頼り先や居場所が複数あればそれだけ安心の度合いが高まってくるのかなと思います。このあたり、実践をやっていくうえで工夫されていることなどはあるんですか。

吉水 工夫とはちょっと違うかもしれませんが、コスモスの皆さんがやっていらっしゃることですごいなと思ったことがあります。以前、訪問看護の時間と利用者さん本人がお話したいというご希望の時間が少し合わなかったときに代わりに私を呼んでもらってお話ししたことがあったんです。行くとまず私に「あんた、誰」とおっしゃるわけです。その時点ですでに、コスモスのスタッフの方々と、その利用者さん、訪問される側の関係性がすごくよくできていて、本当に楽しみに待っていたからこそそうおっしゃっているのだと感じられました。居場所というのはもちろん場所でもあるけれど、安心できる人自体が居場所になることも

あると教えられました。コスモスさんの看護師たちが行っているところは、看護師自身が居場所というか安心できる場になっていて、温かさが感じられます。その温かさはきっとコスモスさんが相互の関わりのおかげで築いている温もりなんだなと思いました。ホームというのが、出かけた先にも形成されているのはすごいことに思いました。

白波瀬 あちこちのホームがそうなんでしょうね。

吉水 訪問先につながりが生まれるから、次来るまでに何をしておこうとか、話を準備してくださる方もいらっしゃるのでしょうか。あと、聴いてくれる人がいるから自分の変化にちょっと気を遣うようになる、そうした関わり方の積み重ねが生きる意欲になるのだと、コスモスさんに連れて行って行かせてもらったお宅で思ったことでした。

白波瀬 今の話を聴いていると、コスモスさんも光照院さんも山友会さんもそうかもしれないですけど、自分の守備範囲ってあるわけじゃないですか。一般的に考えられているお寺の取り組みの範囲、訪問看護は訪問看護として期待されている制度上の範囲というのが一応あって、でもそこを少し飛び越えた部分がそれぞれの団体にあり、そこをクロスしてつなげていくことで地域の連携があるのかな。吉水さんの話もそうだけど、コスモスさんの都合が合わなかったときに続きの話を吉水さんに訊くということなどは、そもそもこう余白の部分がないとなかなか生まれないのかなと。そのあたりは、山谷ならではかどうかはわかりませんが、この地域で色々なつながりが生まれる重要なポイントかな、と思って話を聴いていました。

この座談会は、山谷という場所がどういうところなのか、どういう活動をしているのか、多くの人に知っていただくよい機会になると思っていきます。ありがとうございました。

注

- 1) 光照院がある台東区清川をはじめ、日本堤・東浅草など、簡易宿泊所が密集している地域の通称(旧地名に由来)。大阪の釜ヶ崎(あいりん地区)、横浜の寿町に並ぶ三大寄せ場とされる。
- 2) ひとさじの会に関する近年の論文としては、高瀬顕功「社会活動における宗教的価値の相反と克服—浄土宗僧侶によるホームレス支援を事例として—」(東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報2018』リトン、2018年)がある。